

〔内藤戊申〕

古代の蒙古

支那歴史地理叢書第五

内田 吟 風著

古代の蒙古といへば、だれしも元朝蒙古の勃興期をおもふであらう。しかし、こゝにいふ古代蒙古は、蒙古の地に歴史の光がさしそめてから、匈奴の興起、崩壞までをとりあつてゐる。これには蒙古の歴史を單なる民族の交替とせず、現代蒙古民族に至るまでの一貫した傳統と統一ある歴史をみる著者の根本的態度がみとめられる。これは蒙古史研究にとつてひとつの前進である。

ばらばらの民族交替史から一貫した蒙古史の確立、こゝには沙漠と草原とに生をえた游牧民文化の必然性、その發展の自律性に對するふかい同情がある。これはいままで、從屬的にしかみななかつた蒙古の民族興亡を支那史料による塞外史的觀察を破棄したものである。つまり蒙古史研究における二重の前進、すくなくともその試みであるといへよう。

著者は支那最古の文獻である殷墟の甲骨文について、游牧民文化の發祥をかんがへ、網石器とか土器の考古學的遺物について、その活動のありさまをのべ、『穆天子傳』を穆王の蒙古横斷記とみて、前十世紀頃の蒙古の状態をとき、ついで一轉してたゞちに匈奴の勃興期、さらにその全盛期、崩壞期におよんでゐる。この匈奴時代は古代蒙古のもつとも華々しい時代であるとともに、また

本書の主要なる部分をなすものであつて、その政治史をととき、その文化交流をととき、その言語風俗をとくうちに著者多年の蘊蓄がうかゞはれる。

その間、著者は古文獻のみならず、支那古銅器、綏遠青銅器、ノインウラ遺物、トルキスタン出土品等近時發見された諸種の遺物遺跡等をとりいれ、つとめて豊富なる内容をあたへることに苦心してゐられるのは、特に本書のためにこゝろみられた新しい意圖であるらしい。とにかく綜合的な古代蒙古史として、まつたく新しい觀點にたつてゐる上に、論斷また獨創的であつて、單なる啓蒙的述作ではない。わたくしとしては、一二考古學的遺物の解釋において異論を有するものがあるけれども、それは決して本書の價値を左右するものではないとおもふ。(四六版、本文一五九、附録二五頁、圖版四、地圖一、昭和十五年四月、富山房發行、壺四貳拾錢)(水野清一)

蒙古の祕史

小林高四郎譯註

翻譯といふものは至難な業である。局部的詳細に拘ればとかく譯文が生硬に陥る。譯文を整へてもなほ且原文の持つニュアンスを如何に漂はすかの問題が残る。畢竟翻譯にはすべてを復原することは望み得べくもない期待であらう。其は唯原語を通じてのみ許さるゝ特權でなければならぬ。

従つて翻譯を志す者には、何よりも先づその限定を持つことが